

さわやかなこだわり



河原 多恵子 (かわはら たえこ)
アナウンサー

岩見沢市生まれ。北海道立札幌北高等学校、北海道女子短期大学体育科を卒業し、北海道放送(株)へアナウンサーとして入社、数々の番組を担当。2011年、第48回ギャラクシー賞ラジオ部門大賞受賞作、ラジオドキュメンタリー「インターが聴こえない～白鳥事件60年目の真実～」のナレーション担当。2012年2月からフリーランスとして活動、朗読会や言葉のワークショップなど開催。HBC-R「多恵子の今夜もふたり言（毎週日曜21：00～21：30）」パーソナリティー。

4月から、時々富良野に行っています。ドラマ「北の国から」のファンとして何度もロケ地を訪問し、またここ数年は北海道小麦の勉強会に参加して、富良野や美瑛、帯広十勝をめぐるっています。しかし、今回は仕事です。JRに乗車して札幌から滝川までうつらうつら。ここで乗り越してはなりません（笑）。滝川から富良野行きに乗り換えて約1時間、左右の景色を眺めているうちに到着します。車で知人宅へ向かう途中、坂道で振り返ると、市街地方向に連なる山並みの美しいこと。富良野は盆地で豊かな大地であることがわかります。この風景を見た瞬間、詩人・茨木のり子さんの作品「笑う能力」を思い出しました。詩の中で、山の新緑を「どよもして」という言葉であらわしています。「どよもす／響もす」とは、どよめかせる・鳴り響かせること。この言葉に出会って以来、言霊にグイと引っ張られています。北海道の初夏は新緑から深緑の輝きへ。どよもす季節、到来です。

カバー

本棚を整理しています。断捨離のポイントは残す・売る、使う、読者を探す、そして飾る。表紙の気に入った本は面出し本棚に置き、積読や未読の本を見つけて一喜一憂しながら続行中です。

書店で本にカバーを掛けるか掛けないかを聞かれることが多くなりました。ひと頃は必ずカバーを掛けて渡され、それは当たり前のサービスと思っていました。

カバーは嫌いだからと、せっかく掛けてくれたものをはずす友人がいて、「ならば初めから断れ！」と仲間で散々文句をいったのを思い出します。きれいな包装紙を折ってカバーにする、布や和紙でオリジナルカバーをつくって楽しむといった本好きの方も多いようですね。さて私は？本を大切に扱いたいからカバーは必要。しかし、表紙が好きな本にはカバーを掛けずに読みたいといったわがままな読者、要・不要に迷います。カバーを断ると袋に入れてくれますが、本が何冊にもなったとき、雨や雪、バッグが小さくて入らないときなど本当に助かります。でも、私はいつも大きな

バッグを持ち歩き、おまけにエコバッグも持参しているので、ほとんどの場合は「ここに入ります」といって袋を断ります。そうすると書店に限らず、会計済みの印として品物にシールを貼ってくれます。「袋は要りません」と伝えるとササッとシールを付け、「ご協力いただきありがとうございます」と頭を下げてください。が、ここが期待と緊張の瞬間です。

シールの位置が気になってしまい、つい手元を観察。時には「そこに貼らないで」と、心の中心で叫ぶことも。ラベルの美しさとデザインが気に入って選んだ、そのど真ん中にシールがベタベタ貼りついてしまったら？不運を嘆き、自分勝手なこだわりを反省して、シールはがしに集中します。話を元に戻しますが、本にカバーを掛ける・掛けない、どちらでしようか？

鉛筆

書くものを貸してほしい、こういわれたら何を差し込めますか？ボールペン、シャープペンシル、鉛筆、油性ペン、万年筆、毛筆、子どもだったらクレヨンかもしれないですね。

いつも鉛筆を愛用しています。手帳用は某ブランドのボールペンです。こちらは滑らかにスラスラ書けるので、自分が悪筆であることを忘れる利点があって重宝しています。ラジオのニュース番組を担当していた当時、資料に印をつける赤鉛筆は仕事の必需品でした。毎日使うからすぐ短くなる。おまけに赤印を付けすぎた結果、生放送中に重要な箇所を見失い、目が点になったこともあります。そして、鉛筆を削る道具は今もナイフで、鉛筆削り器はめったに使いません。音や引っ張られていく感触が苦手なこと、まして削った鉛筆の先がどれも同じでは(当たり前ですが)、つまりません。ナイフで鉛筆を削っていくと、四苦八苦していた考えがスルスルほどけていくから不思議です。気持ちを集中して一片・一片削った鉛筆は程よく芯がとがって木目が美しく、指先に残ったかすかな木の香りも好きです。仕事でインタビューした歌手の山下達郎さんはスタジオにいる間、手もとに鉛筆を置いていました。鉛

筆で譜面を書き、曲作りをすると聞いて意気投合。

さて、短くなった鉛筆をどうしていますか？なかなか捨てられないものです。

短い鉛筆を2本、セロハンテープでつなぎ合わせて使ったこともありましたが、力が入らず勉強には不向き、書きにくかったですね。あるとき、中学高校時代の筆入れの定番文具で、短い鉛筆にさして使う、通称・鉛筆サックを思い出しました。「アレ」があると便利なのに。でも呼び名がわかりません。ところが、ホームセンターの文房具売り場で「アレ」を発見したので。旧友にばったり再会した気分です！名称は「消しゴムつき補助軸」。特徴は消しゴム付きで耐久性に優れ、さらにベルマーク付きと袋には書いてあります。2本セットで200円ほど。もちろん購入して、早速、同じく鉛筆を愛用する友人に1本進呈すると、「あったのね〜」と歓声をあげました(笑)。

日常生活で鉛筆の出番はどのくらいあるでしょうか。だんだん少なくなっているような気もします。しかし、短くなった鉛筆も、それらを使うための道具もキッパリ現役です。どちらも仕事の道具として大活躍しています。



書くもの(中央が補助軸)